編集委員 雨宮処凛・石坂 啓・宇都宮健児・落合恵子・田中優子・中島岳志・本多勝一

週刊金曜日
11|9 2018
1208号
毎週金曜日発売
定価580円

創刊25周年

安田純平さんへの「自己責任論」

自由党 森ゆうこ幹事長に聞く

舞台

流山児★事務所『わたし、と戦争』

作・演出：瀬戸山美咲（ミナモザ）
芸術監督：流山児祥
2018年10月17日～10月24日、東京・下北沢 ザ・スズナリ。公演終了。（撮影／横田敦史）

日常に侵入する戦争の痕 帰還兵の再生描く

藤原央登
ふじわら　ひさと／劇評家

子どもを含む民間人を銃殺した兵士のユリ（林田麻里）、マキ（町田マリー）。陰惨な光景を目にしたマキは精神が錯乱し、死んだ自分の子どもが生きているように振る舞う。ユリが本当のことを伝えた後にマキは自殺。そのことへの後悔のあまり、ユリは心的外傷後ストレス障害（PTSD）となった。帰還したユリの再生を描く。

鉄パイプでジャングルジムのように組み上げた舞台美術が戦場を思わせ、リビングや支援センターといった日常を取り囲む。日常生活に侵入する戦争の痕が視覚的に表現されている。

帰還兵を過度に英雄視する家族、雑誌の売り上げのために帰還兵を利用しようとする編集者。他者による配慮や労りの裏に、自己保身や利益誘導という打算が隠されている。それを限りなく拡大すれば、「平和」のためと称した戦争へと至る。人間である以上、失くせない嘘や方便という心性に、戦争の種があること。帰還兵に対するカウンセリングを終えたユリが、「役に立ちたい」と戦地に戻ろうとする。この台詞に、戦争の根絶の難しさを感じさせられた。戦争と日常をつなぐさりげない描写が、作品の太い幹となっている。

ただし、マリンブルーの照明、ユリが見合い相手のタクヤ（甲津拓平）と会話する海浜公園。過酷な戦場とは真逆の雄大な海のイメージが、作品を読み解く上で強い焦点を結んでこない。その点にはもどかしさが残った。

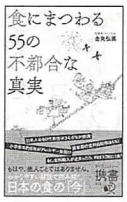
エネルギッシュないつもの作品とは違い、リアリズムを基調とした俳優の演技が人物の内面を繊細に表現。劇団が扱う作品の幅広さが認められた。

本箱

吉田亮子（編集部）／選

香料自粛の呼びかけを相談した保護者に「香り付き柔軟剤を選ぶ自由を奪えない」と言った学校に驚愕。すぐできる香害・電磁波対策も。

『シックスクール問題と対策』
加藤やすこ＝著　緑風出版
1800円＋税　ISBN978-4-8461-1813-6



食料輸入が止まったら、卵は15日に1個、肉は10日に1食になるとか。健康、食生活、安全、自給率、農業の分野で食の「今」を読み解く。

『食にまつわる55の不都合な真実』
金丸弘美＝著
ディスカヴァー・トゥエンティワン
1000円＋税　ISBN978-4-7993-2353-3

たしかに食材の背景や食べ方がわかったほうが、購買意欲が湧く。さらに現地にも足を運びたくなる。仕掛け人が明かす、そのノウハウ。

『地域の食をブランドにする！ 食のテキストを作ろう』
金丸弘美＝著　岩波ブックレット
620円＋税　ISBN978-4-00-270988-8

「白いご飯は味がないから苦手」……、えっ?! 400人以上の主婦へのアンケートと1万5000枚以上の写真から家庭の和食の実態が明らかに。

『残念和食にもワケがある　写真で見るニッポンの食卓の今』
岩村暢子＝著　中央公論新社
1500円＋税　ISBN978-4-12-005016-9

三浦しをん『まほろ駅前狂騒曲』に出てくるナポリタンに、こんな意味があったとは。100の文学作品をおいしそうな挿絵とともに、どうぞ。

『文学はおいしい。』
小山鉄郎＝著
ハルノ宵子＝画　作品社
1800円＋税　ISBN978-4-86182-719-8

「やけた！」のページで大人も子どもも笑顔になることうけあい。「わらべうた」シリーズは楽譜と遊びの紹介つきで、ほか2冊も同時出版。

『おせんべ やけたかな』
こがようこ＝構成・文　降矢なな＝絵
童心社
950円＋税　ISBN978-4-494-01259-6

食に関するエッセイが多く、8月15日は戦争当時の日記を読み返し、すいとんを作って食べたという記述。平和への思いがあふれています。

『楽しく百歳、元気のコツ』
吉沢久子＝著　新日本出版社
1200円＋税　ISBN978-4-406-06282-4

61人が描く平和へのメッセージに、憲法の条文をそえて。前文のページの中には「家族でふつうにごはんをいただく」長谷川義史の作品。

『戦争なんか大きらい！　絵描きたちのメッセージ』
子どもの本・九条の会＝著　大月書店
1800円＋税　ISBN978-4-272-61236-9